



TITLE:

自由9 野生ニホンザルの群れサイズ調査法の検討(V 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

斉藤, 千映美

CITATION:

斉藤, 千映美. 自由9 野生ニホンザルの群れサイズ調査法の検討(V 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1998, 28: 102-102

ISSUE DATE:

1998-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165104>

RIGHT:

自由9

野生ニホンザルの群れサイズ調査法の検討 斉藤千映美（自然環境研究センター）

カウント法は、ニホンザルの群れサイズ推定法として一般に使われる。しかしその方法にはさまざまな誤差があると考えられる。本研究では、①カウントの個体差、②単独でカウントを行う場合と、複数人数で行う場合の結果の差、③再発見法による個体数の推定法、を検討した。対象は宮城県金華山島に生息する野生ニホンザルの群れ（A群、B1群）である。両者とも比較的人なれしており、通常数十メートル以内の距離で観察できる。まず1997年5—7月に、学生など9人にそれぞれオスとメスとアカンボウの見分けかたを教え、約1日間、熟練した観察者とともにA群を追跡してもらった。その後、観察された頭数と予測される頭数をたずねたところ、いずれも熟練した観察者の観察頭数を下回った。次に熟練した観察者が単独でカウントを行った場合と、2人一組で「追い出し法」によるカウントを行った場合を比較したところ、追い出し法でより多くの個体を確認することができた。最後に、特定の個体の再発見率を指標とする個体数の推定では、B1群のコドモのオスとメスを指標として比較を行ったが、大きな差は見られなかった。

カウント結果には経験による差があり、経験の少ない人間による数回の推定だけでは群れサイズを実際より小さく見積もる可能性が高いこと、経験がある人間も、単独よりは複数でカウントする方が正確であることが示された。再発見率を指標とする方法については、今後の検討が必要である。

自由10

ニホンザルのグルーミングにおける 外部寄生虫除去の効率 座馬耕一郎（京都大・理・人類進化論）

ニホンザルはグルーミングによってシラミやその卵を取り除いていることが知られている。しかし、多くの研究は、グルーミングを「持続時間」や「頻度」で評価するのみである。そこで本研究では、「シラミ卵を除去する行動の回数」を指標として、グルーミングの持続時間とシラミ卵除去行動回数との関係、およびシラミ卵の除去効率を明らかにし、グルーミングを外部寄生虫除去行動という視点から再評価することを目的とした。

調査は、京都市嵐山のニホンザル餌付け群を対象におこなった。1997年5月7—29日に、コドモ（頭胴長約30cm）2個体、1997年10月6日—11月4日にオトナメス（同、約52cm）、ワカモノメス（同、約48cm）、コドモ（同、約30cm）、各2頭をそれぞれ4日間個体追跡した。グルーミングをビデオに記録し、体の各部位（頭、胸、腹、背上、背下、腕内、腕外、脚内、脚外）について、グルーミングされた時間とシラミ卵除去行動回数を調べた。その結果、以下の点が明らかになった。（1）観察時間にしめる各個体のグルーミング時間の割合は平均5—15%であり、グルーミング1分間あたりのシラミ卵除去行動回数（除去効率）は、0.6—3.0（回/分）であった。また、グルーミング時間、シラミ卵除去行動回数は、頭胴長と相関がなく、体サイズが大きくなってもグルーミング時間が長くなるというわけではなかった。（2）どの個体でも、背上、背下などの体の外側に面している部位の方が、腹、胸などの体の内側に面している部位よりも長い時間、グルーミングを受ける傾向があった。また、よりグルーミングを受けた部位では、より多くのシラミ卵除去行動が観察された。

シラミの除去効率は、個体間で5倍の差がみられた。この差の要因は、各個体に寄生するシラミ卵の数によるのかどうか、今後の調査が必要である。